

「小児の消化管内視鏡検査法」

多田 正大 京都第一赤十字病院医長
京都府立医科大学客員講師 著
川井 啓市 京都府立医科大学教授

順天堂大学教授・小児科
加 藤 英 夫

百聞は一見に如かず，ということがある。私は小児科医であるが，ときどき皮膚科医を羨ましく思うことがある。それは皮膚疾患はその病状が文字通り眼に見えるからである。

さて，本書は小児の消化管の内面を最も進歩した内視鏡で見た所見に基づいて，小児の消化器疾患の診療を具体的に記述した少なくともわが国では類例を見ない著書である。

著者は京都第一赤十字病院の多田内科医長と京都府立医大の公衆衛生学の川井教授であり，やや奇妙な組み合わせであり，小児科の専門医ではないが，内視鏡検査法の開発当時から小児の消化管検査法を特に意識的に研究してこられた専門家である。私は3年前に日本小児消化器病研究会(沢田淳会長)で，「最近の小児消化器病疾患の動向」と題する川井教授の特別講演を聞き，一見専門外である学者の講演としては極めて興味深く，われわれ消化器疾患に関係している小児科医の弱点を指摘されたような感銘を受けた。

本書の内容は Part 1 として内視鏡検査の歴史から始まって，小児消

化器疾患の疫学，内視鏡の構造と使い方，内視鏡検査の前処置，挿入法(上部消化管，小腸および大腸)，膵・胆管造影法，消化管出血，異物，ポリポーシスなどの内視鏡的処置について記述されており，Part 2 では上部消化管疾患として，食道狭窄症，食道静脈瘤，肥厚性幽門狭窄症，胃・十二指腸潰瘍および胃癌その他の腫瘍，下部消化管疾患として，消化管重複症，Meckel 憩室，Hirschsprung 病，潰瘍性大腸炎，キャンピロバクタ腸炎，薬剤性大腸炎，腸重積症，大腸ポリープ，大腸腺腫症，Peutz-Jeghers 症候群，大腸癌その他の腫瘍，膵・胆道疾患として，先天性胆道閉鎖症，胆道拡張症，胆石症および膵炎について記述されている。

内視鏡の操作法，各種疾患のX線所見および内視鏡所見などが鮮明な写真によって解説されており，特に内視鏡所見はきれいなカラー写真が豊富に使用されている。

解説文は簡単明瞭にわかりやすく書かれ，読んでいて気持が良い。ところどころに引用されている症例も

その理解を容易ならしめている。なお，各節ごとに数冊ないし十数冊の参考文献が付記されているのは親切である。

特に私どもも試みたが，内視鏡を用いて行う逆行性膵胆管造影は小児においても今後広く行われるべき検査法であると思うが，本書ではその操作を具体的に指示しており，胆道および膵管をかなりの末梢まで造影しえた像を掲載している。また，消化管ポリポーシスの症例についてのX線像およびカラーの内視鏡像は真に鮮かである。

なお，本書の刊行には京都第一および第二赤十字病院および京都府立医大の小児科学教室の協力があつたとされているが，それによって本書の内容が一層豊富になったと思われる。小児の消化器疾患に興味を持っている小児科および小児外科の医師のみならず小児の診療に関与している臨床医には好個の指導書であり，敢えて推薦する。

B 5判 頁134 図33 写真52
原色図56 1982年 ¥8,400 円300
医学書院 刊